ゼルダの伝説　勇気の楽団

ケポラ・ゲボラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼルダの伝説　勇気の楽団

【Ｎコード】
Ｎ１６３１Ｚ

【作者名】
ケポラ・ゲボラ

【あらすじ】
――かけがえのない、仲間と共に――

魔王が現れた時、勇者は必ずそれを打ち倒し、光の姫君と共に封じてきた。しかし、百年前の復活の時、その輪廻が崩れた。勇者は幼いうちに魔王の手先の手に落ち、魔王の復活、そして野望を潰えさせる者はいなくなってしまったのだ。
だがしかし、三種の亜人から勇なる者が一人ずつ立ち上がって光の姫君を支え、魔王は再び封じ込められたのだった。

そして今。名も無き旅人が平和を取り戻した世界を行く。なくした記憶を求めて。

内容、展開はオリジナルです。

プロローグ

この世界に闇満ちる時、必ず勇者が現れる。
森を抜け、火の山に入り、水面の下を行き、砂漠を越え、折には時をも渡って勇者は魔を滅する力を手にした。
かくして勇者は魔を統べる者を討ち倒し、この世界に光を取り戻すのだ。幾度魔が封印を破ろうと、必ず勇者は現れ、この世界を光の姫君と共に救い続けてきた。未来永劫、この輪廻と共に世界は続くだろう。そう伝えられてきた。

だがしかし、ついにその輪廻が崩れた。目覚めぬうちに勇者は魔の手に落ち、世界は崩壊の一途を辿った。人の統べる王国は滅び、山は火を噴き、水は血に濁った。
その時、光の姫君を支えるべく、三の勇なる者が現れた。火の山に生きる剛腕の民、湖に生きる叡知の民、森に生きる勇気の民。彼らと共に、光の姫君は魔の体より魂を分かち、再び封印を成したのだ。魂は砂漠の果て、体はハイラルの城の跡地に。

苦難の果てに手にした百年の平和。世界の民は希望を取り戻しつつあったが、再び魔は蘇ろうとしていたのだ。

1，ハイネ村

青空の中を、二羽の小鳥が飛んでいく。友達のようにも、つがいのようにも見えるその鳥達は、楽しそうに平和な空を飛びつづけていた。

だが、それを目にしたとある青年は、そんな事を考えつつも、むしろあの小鳥で自分の腹がどれだけ満たされるかということで頭がいっぱいになりそうだった。

青年に名前は無い。というよりは、全く記憶に無かった。何をかくそう、彼は記憶喪失に陥っているのだ。自分がどこの誰なのか、何をしてきたのか、皆目見当がつかなかった。

それ故に、この青年は旅をしていた。自分の記憶を求め、ハイラルの平野を村から村へと渡り歩く生活を数ヵ月続けていたのだ。

だが、ついにそんな生活も限界を迎えてしまう。ルピーが尽きたのだ。世界の至るところで見つかるその小さな宝石は、時には雑草を掻き分けただけでも見つかる。しかし、それで見つかるのは雀の涙ほどの価値しかなく、その日暮らしが精一杯。そんなわけで、この青年は雑草を掻き分ける気力も無くしてしまうほどに飢えてしまったのだ。何ができるかといえば、その場に寝転がることだけだった。

そんな彼は手元を探り、小さな花を摘んだ。もちろん、花の美しさを楽しもうというつもりは毛ほども無く、彼は花をがくから摘み取り、その根元を吸った。

「……甘い」

彼はか細い声で呟いた。しかし、花の蜜で限界の空腹を満たせるはずもない。目を細めて花を見つめると、おもむろにその花びらを口に突っ込んでしまった。よく噛んで飲み下し、そして口を歪める。

とても食べられる味ではなかった。青年はため息をつき、ふらつく体を何とか持ち上げる。本当はまともに動ける状態ではないのだが、動かなければ本当に死んでしまう。彼は旅嚢（りょのう）を背負うと、鳴くこともできなくなった腹の虫を押さえながら周囲を見渡す。すると、南の方角に小さな村が見えた。その辺りから、白い煙が細く立ち昇っている。こちらに向かってくる風を胸いっぱいに受け入れると、微かにパンが焼けるような匂いがした気がした。青年は表情を和らげると、すっからかんの旅嚢を背負い直し、一路村へと向かって歩きだした。

時同じくして、ハイラル平原、フィローネの森のそばに位置したハイネ村。そこでは、純白で飾り気のないドレスに身を包んだ一人の少女がそわそわとしていた。肩まで伸びたつややかな髪をなでつけたり、胸の前で白くしなやかな指を小さく動かしてみたり、蒼く澄んだ瞳できょろきょろと周りを見回したりしていた。村の人々が総出で『成人の儀』の準備を進める中、主役の彼女、ゼルダは椅子に座らされてその光景を見守り続けていたのだ。

この『成人の儀』は、彼女だけの為に用意された儀式だ。何せ、彼女はハイラル旧王家の血を引き継いでおり、これから目指していく王国の復興のために無くてはならない存在なのだ。特別に儀式を執り行うのも、至極当然のことだろう。

ゼルダはそんな様子を見つめてため息をついた。頭の中はもう、儀式の終わりにハープを演奏するということだけでいっぱいだった。一応村でも屈指の腕前とは言われるものの、緊張してしまうものはしてしまうのだ。

「ちゃんと弾けるかな……」

ゼルダはうつむき、再び空で弾いてみた。自分も母から何度も聞かされている、昔の王家に伝わるという子守唄。今日は、みんなが彼女の奏でるハープの音色、そして歌声に耳を傾けるのだ。緊張するなと言われてもできなかった。

「ゼルダ。何やら浮かない顔をしているな」
頭の上から声がして、ゼルダはゆっくりと顔を上げた。そこに立っていたのは、新調した衣服に身を包んだ父の姿だった。気位のあるその目でもって、ゼルダの表情をじっと窺っていた。ゼルダは苦笑いすると、髪をなでつけながら立ち上がった。
「まあ……ね。失敗したらどうしよう、って、少し考えちゃって……」
父は柔らかく笑い、ゼルダの肩をそっと叩いた。
「気に病むな。いつも楽しんでいるように弾けば、歌えば、それで十分だ」
ため息をつき、ゼルダは父の服の胸に刺繍された王家の紋章を見つめた。そのうちに、どこか諦めのような気持ちが現れてきた。彼女は肩をすくめ、どこかにあどけなさを残した微笑を浮かべた。
「そうね。今さらどうこう言ったって、仕方ないもの」
「ああ。その意気だ」
親子は笑いあい、儀式のための舞台を見た。着々と木が組まれ、この日のために作られた白い垂れ幕も、人々がああでもない、こうでもないと言いながら備え付けていた。しばしゼルダはその様子をぼんやり見つめていたのだが、いきなり彼女は目を凝らし始めた。その視線の先には、やたらとおぼつかない足取りで歩いている青年の姿があった。本来ははっきりした目、整った鼻に薄い唇の美青年であったろうに、今の姿はかなりやつれているように見えた。ゼルダは一目で放って置けなくなり、小走りでその青年に向かって走った。
「む？　ゼルダ、どうした」
「うん、ちょっと気になることがあるの！」
ゼルダは一瞬振り向いて父に手を振ると、再び青年の方に向かって走った。一歩踏み出す度にふらついており、青年はこの村に辿りついたことさえ奇跡のように思えてしまう。ゼルダは青年の表情を窺い、一歩一歩慎重に近づきながら声をかけた。

「ねえ、お兄さん？　大丈夫ですか？　すごくつらそうに見えるのですが……」
彼は顔を上げて微笑むなり、急に倒れこんでしまった。ゼルダは心臓がひっくり返りそうなほどに驚き、慌てて彼に駆け寄り支えてあげた。
「一体どうしたんですか？」
青年は微笑むと、消え入りそうな声で呟いた。
「……パンを。何か食べられるものをください……」

2，天然な青年

「え……じゃあ、三日も食べ物を口にしていないんですか？」
ゼルダは呆気に取られ、その引き締まっている口元をぽかんと開け放ってしまいながら青年に尋ねた。随分と腹を空かせていたように見えて、彼は儀式前の祭りに出される予定のパンや果物を次々口に押し込んでいる。そのお陰で、ゼルダの質問にも頷きで答える事しかできなかった。慌ただしい食事を見て、ゼルダの父は腕組みしながら感心したような声を上げる。
「ほう、そんな体で三日も生きていられるのか。……私のようならともかく」
小さな声で最後に付け足す。ゼルダは口を尖らせながら父親の姿を見つめた。村一番の身長で、その身長を支えるだけのたくましい肉体を持っているのだが、残念なことに最近太りだしてしまった。母と娘は、この事態を少々憂慮しているのだ。
「太るのはこの村が順調に発展してる証拠だけど、ほどほどにね」
「ああ。気をつけよう」
ゼルダが父の腹回りを指差すと、父は肩をすくめながらそそくさと行ってしまった。ゼルダはその背中を見つめ、腰に手を当てながら呟く。
「まったく、仕方ないんだから……」
すると、背後から優しい笑い声が聞こえてきた。振り向いてみれば、いささか食欲が落ち着いた様子の青年が、テーブルに肘をついて指を組み、その上にあごを載せて、柔和な笑顔でこちらを見ていた。
「仲がいいんですね」
見知らぬ人物にいきなり家族仲を褒められ、ゼルダはほんのり頬を染めた。照れ隠しに肩を竦め、小さくはにかむ。
「そう、でしょうか？　普通だと思いますけどねぇ」

「そうなんですか……いやあ、僕、普通というものをよく知らなくて」
準備の音頭を取り始めたゼルダの父を目で追いながら、青年は心地の良い春風のような声で呟く。ゼルダはその言葉に不自然を覚え、目を細めながら彼に尋ねた。
「普通を知らない？　どういうことですか？」
途端に青年は困ったような顔をした。苦笑いし、茶色の髪をくしけずりながら目を泳がせる。
「僕、実は何も覚えていないんです。身の回りのこと全て、名前さえもわからなくて」
ゼルダの顔が急に曇った。今まで彼に対して抱いていた好奇心というものが、みんな同情心に変わってしまったのだ。視線を落とし、彼女は暗い口調になった。
「ご苦労なさっているんですね」
「それほどの事じゃありませんよ。最近野盗に色々な物を取られてしまって、それからは少し大変でしたが」
ゼルダは改めて青年の顔つきを眺めた。見た目が整っているのは確かなのだが、どうにも頼りないところが感じられる。物を盗られるのも無理がないように見えた。
「それは……お気の毒に」
青年とゼルダは見つめあい、困ったような顔で微笑みあった。そんなところに、一人の青年が手を振りながら駆け寄ってくる。
「ゼルダぁ！」
青い髪を風に流した、そばかすだらけの青年だった。ゼルダは小さく手を振り返し、その青年の方に向き直った。
「アルフくん。どうしたの？」
「ゼルダ、大丈夫か？　緊張してない？」
矢継ぎ早の質問と共に、アルフはゼルダに詰め寄る。その顔があまりに近く、ゼルダは引きつった笑顔でのけ反った。手を控えめに持ち上げ、そして小刻みに頷く。

「う、うん。まあね。心配してもらわなくても、大丈夫。うん」
先ほどまで飢えていた青年は目を細めた。下手に動けば額と額がぶつかってしまいそうなほどに近づいているゼルダとアルフの間を見て、彼は率直な感想を口にした。
「近いですね……」
アルフは急に青年の方に振り返った。そして、顔をしかめて彼のことを睨み付ける。そもそも、アルフが二人のところに近づいてきたのがこのためだったのだ。
「ああ？　誰だよお前」
アルフのぶしつけな迫りかたに、ゼルダは気まずそうに唇を噛みながら二人の顔を見た。いきなり敵意をむき出しにされてしまった青年だったが、彼は反発せず、にこやかな顔で考え始めた。
「うーん。誰、ですか？　……誰なんでしょう？」
青年は微笑みながら首を傾げた。その仕草が癪（しゃく）で、アルフはテーブルを強く叩いた。
「俺をばかにしてんのか、お前は――」
「はい、ダメ、ダメ！　アルフ、この人は記憶を無くしてるの！本当に自分が誰なのかわからないのよ！」
「嘘つけ！　そんなことあるかよ！　どうせ同情を誘って、村の外でも評判の、ゼルダの気を引こうとしてるんだろ！」
アルフという男は、ゼルダに関する話となると、どうしても見境が無くなってしまうのだ。今にも胸ぐらに掴みかからんばかりの勢いである。青年は困ったように微笑み、中途半端に伸びてくるアルフの腕を掴んだ。
「落ち着きましょうよ。別に、僕はゼルダさんに飢えを救ってもらっただけですから」
「俺は騙されないぞ。ゼルダの気を引こうったって、そうはいかないんだからな」
青年の手を無理やり引き剥がそうとしながら、アルフは青年に向かってまくし立てる。そんな様子を見ていて、青年はふと何かに気

が付いた。アルフの腕を話、そのまま人差し指を立て、心得顔で頷いた。
「ああ、なるほど。あなたはこのゼルダさんのことが、好きなんですね！」
アルフは耳まで真っ赤になり、ゼルダは顔を背けて肩を震わせた。口元をわなわなと震わせながら後退りし、アルフはあ、とか、う、とか言葉にならないことを何度か口走ったかと思うと、いきなり踵を返し、脱兎のごとく駆け出した。
「そ、そんなんじゃねぇえ！」
アルフの背中をぼんやりと見送り、青年は呆然と首を傾げた。
「絶対そうだと思うんですけどね……ゼルダさん？」
ゼルダは肩を震わせ、明後日の方向を見つめていた。そっと肩を叩くと、ゼルダは満面の笑みで振り向いた。必死に笑いをこらえているらしく、今も唇が震えていた。
「あなた、随分面白い人ですね」
「はい？」
「だって、あんなにはっきり言うなんて。確かに、そんなことは私自身も知ってるんですけどね……ふふ」
ゼルダはこらえきることができず、ついに笑ってしまった。無垢な青年も、それにつられて声を上げて笑う。その笑い声も、そよ風のように穏やかだった。
ひとしきり笑った後、ゼルダは青年に再び話しかけた。
「どうですか？　この後、『成人の儀』というものがあるんですが、もしよければ、見ていきませんか？」
青年に断る選択肢はなかった。
「ええ。もちろん見ていきますよ」

3，ボコブリン

こうして、青年はハイネ村の『成人の儀』に参加していた。青年は同世代の若者たちに好奇心を持って迎えられ、常に囲まれ、旅について尋ねられ続けていた。青年は考え込みながら、思い出せることだけを口にした。そんなようにして宴も終わり、残すはこの村一番年長の老婆による口上と、ゼルダの演奏、歌だけだ。人々が静まった中で、老婆が木製の壇の上に立ち、咳払いをする。

「皆の衆、毎年話している通りの経緯で魔王が封じられ、まさに百年が立とうとしている。そんな年に、光の姫君の血を引くゼルダが成人を迎えるのだ。これは、まさに運命的な事態だとは思わないか。そもそも、百年もの長きに渡って、我々がハイラル王国を再興できずにいたのは、ハイラルの大地に未だ魔王の残した瘴気が残っているからなのだ。だが、私は信じている。そんな日々も、もうすぐ終わりを迎えるのではないか。そんな気が私はするのだ」

老婆が言葉を切ると、その言葉に同調した人々が一気に歓声を上げる。それだけ王国再建の機運が高まっているのだ。王家の血を引く者を擁しているのだから、当たり前の事だった。老婆は両手を広げ、静まるように合図を送る。

「さあ。今日はゼルダの成人を祝おうではないか。ゼルダ。このハープを……」

老婆が台座に置かれていた金色のハープを手に取り、緊張した面持ちのゼルダに差し出した。彼女は何度も深呼吸をしてから、静かにそのハープを受け取った。その時だ。

「お、おお……これは……」

老婆が静かに後退りし、ゼルダの姿を驚嘆の眼差しで見つめる。壇の下にいる人々も同じだった。皆が目を丸くして息を呑む。だが、一番驚いていたのは当のゼルダだった。ハープを受け取った途端、

急にそれが光り輝き始めたのだ。
「こ、これって……」
ゼルダは弦の一本一本までが金色に輝いているハープを、まじまじと見つめた。子守唄を歌おうという思いは、もうどこかへと吹き飛び、成人の儀ではおなじみであるハープの、全くおなじみでない事態にゼルダはただただ戸惑うばかりだった。
「マ、マルケおばあちゃん！　これって一体どうなってるの？」
「こ、これは……おそらく、たぶん……」
マルケと呼ばれた、壇上の老婆が口ごもっていた時、いきなり村の外れから大きな叫び声がした。豚とも猿ともつかない奇声である。一斉に振り向くと、そこには胸をすくませるような光景が広がっていた。赤い体をして、棍棒を手に持った人型の魔物たちが大勢いた。醜い頭は身長に比べて大きく、体は割りに小さい。そんな魔物たちが、じっとこちらを――ゼルダを睨みつけていたのだ。
「ボコブリンだ！」
人の叫びに反応するかのように、一斉にボコブリンと呼ばれたその魔物たちは駆け出した。冷水を浴びせられたように震え上がり、人々は蜘蛛の子を散らすように逃げ惑い始めた。ほとんどの者には、ゼルダが狙われていることに気がついている余裕など無かった。そんな中で、マルケとゼルダの父がそれに気付いて駆け出す。
「いかん！　ゼルダ！」
壇上に飛び上がったボコブリンを見て、父は慌てて壇上に駆け上がり、ゼルダとボコブリンの間に立つ。娘は縮こまり、その身を不安に震わせていた。
「この魔物共め！　ゼルダには指一本――」
言い終われぬうちに、ボコブリンに腹を打たれ、マルケは苦しげに呻いてうずくまった。父は吼えてマルケを打ったボコブリンの顔面を殴りつけて吹き飛ばす。だが、すぐさま四人のボコブリンに取り囲まれ、袋叩きにされてしまう。ゼルダは尊敬している父が無慈悲に打ちのめされるその姿を見て悲鳴を上げた。

「お父さん！」
だが、とうとうゼルダ自身もボコブリンに襲い掛かられた。逃げる間もなく、彼女は華奢な体に容赦無い一撃を浴びせられた。
「うっ！　くう……」
ゼルダは呻きながらハープを取り落とし、その場に倒れ込む。ボコブリンはそんな彼女を見下ろし、おもむろに彼女を担ぎ上げ、ついでにハープも回収する。本来なら略奪も始めそうなところを、今日のボコブリンは異様に冷静だった。ゼルダを捕らえると、彼らはそのままどこかへ向かって逃げ出してしまったのだ。ゼルダの父やマルケは、そのボコブリン達の背中を睨みつけながら倒れこむ。
「ゼ、ルダ……」
「村長さん！　おばあさん！」
その時、擦り切れだらけの粗末な旅装に身を包んだ青年が壇上に駆け上がってきて、二人のことを仰向けに直す。目をうっすらと開いてみると、それは今日の昼に飢えて現れた青年だった。
「……ああ、君か……大変なことになった。我々は急いでゼルダを探さなければならない。……君は早くこの村を出たほうがいいだろう」
青年は首を振った。柔らかく微笑み、静かに立ち上がる。
「いいえ。僕は飢えを救ってもらったわけですから、何かお礼をしないと、と思っていたところです」
「お礼……？　君は丸腰だったじゃないか！　どうゼルダを助けだすというんだ！」
青年は再び首を振った。あの声には、どうにも思い当たるフシがあったのだ。
「いやあ。あの魔物たちには、僕にもちょっと用事がありまして」
それだけ言い残し、青年はボコブリンの消えた方向へと駆け出した。

4，安物の剣

青年はボコブリンに気づかれないように気を付けながら、足音を忍ばせて後を追いかけた。彼らはフィローネの森に真っ直ぐ分け入り、ゼルダとハープをどこかへと運んでいく。青年は訝しげに目を細め、彼も迷わず森の中へと足を踏み入れた。小枝や落ち葉で足音を立ててしまわないよう、いっそう気を立てながら歩き続けた。たくさん枝分かれした細い道を、ボコブリン達は右へ左へと足早に進んでいく。青年は息を殺し、黙ってその後を付けた。

そのうちに、岩の洞窟が目に入ってきた。魔物達はその場で立ち止まり、くまなく周囲に目を配る。慌てて青年は繁みに飛び込んだ。思っていた以上に大きな音がして、青年は慌ててしまう。ボコブリンも遠くの異変に気がついたらしく、短い奇声を上げて青年の隠れる茂みを見つめた。青年は息を詰め、小さくなってボコブリン達の注意が逸れる時を待った。

気が遠くなるほど長い時間が過ぎた後、ついにボコブリン達は洞窟へと入っていった。それを見届け、青年は勢い良く立ち上がる。優しくしてくれたゼルダを助けたいというのももちろんだが、もう一つ、彼にはボコブリンらを追う理由があった。青年は入口近くの物陰に隠れ、そっと中の様子を窺う。松明を持ったボコブリンの一人が、真っ直ぐ伸びる暗い通路を行ったり来たりしていた。その腰帯には、何やら光るものが付いている。青年はじっとそのボコブリンに注目し、自分のいる入口近くまでやってくるのを待つ。腰帯にぶら下がっているのは、やはり鍵に間違いなかった。青年はその拳を握りしめ、ボコブリンのしかめっ面がすぐそばまでやってくるのを待った。

「せえい！」

それが目の前にやってきた途端、青年は一声叫び、一気に右の拳

を振り抜いた。その一撃をまともに受け、ボコブリンは目を回してふらつく。その隙をついて、青年はその懐に潜り込み、鍵を奪い取った。目の前まで持ち上げ、青年はその手触りを確かめる。

小さなカギを手に入れた！　これで鍵のかかった部屋に入ることができるぞ！

鍵をポケットに納めると、念のためにもう一撃ボコブリンに加えておき、青年は通路をゆっくり進み始めた。暗く、頼りになるのは遠くに光る灯りだけだ。青年は手探りで壁を伝い、今手にしている鍵を使う場所を探した。しばらくはずっとごつごつした岩肌が続いていたが、いきなり木材の感触が手に伝わってきた。近くを探ると、金属でできた鍵穴も見つかった。青年は一人頷くと、鍵を嵌め込んだ。

まさにその瞬間、ボコブリンの奇声が入り口の方から聞こえてきた。おそらく鍵を盗られた事に気がついたのだろう。その奇声に反応して、いきなり洞窟の中が騒がしくなった。青年は一瞬背後を振り向き、それから素早く鍵を回した。一気に鍵は外れ、扉を直接塞ぐように伸びていた鎖が落ちる。丁寧に開くのももどかしく、青年は扉を蹴破った。

小さな丸い部屋の中にも、棍棒を構えたボコブリンが立っていた。木箱やら壺やらがあって、余計に部屋が狭い。青年は楽に事が運ばない雰囲気に辟易し、小さくため息をついた。

ボコブリンが飛びかかってくる。その一撃を前転でかわした青年は、壺を持ち上げボコブリンに向かって投げつけた。きれいにそれの脳天にぶち当たり、ボコブリンはその場に倒れる。それに流れる黒い魔力が消え、ボコブリンは土くれに還ってしまった。それを見届けると、青年は改めて暗い部屋を見渡し、そして部屋の奥に捨て置かれた一振りの剣に気がついた。

「あった！」

青年は顔を輝かせ、駆け寄って剣を拾い上げる。手に伝わってくる木の柄の感触、抜いてみれば、鉄製の簡素な刀身が鈍く光る。間違いなく自分のものだった。青年は笑顔で頷き、高々と鞘に入ったままのそれを掲げた。

安物の剣を取り戻した！　やっぱりボコブリンが泥棒の正体だった！　目にモノ見せてやろう！

青年は剣を背負い、ゆっくりと抜き放った。その目の前に、ボコブリン達が何体も姿を現す。相当腹を立てているらしく、耳障りに騒ぎ喚いていた。青年は静かに魔物達を見据え、一気に切りかかった。先頭の一体が頭を守ったところを、青年はその腹を薙ぐ。続けざまに袈裟懸けに斬りつけ、確実に仕留める。倒れたボコブリンを乗り越え、一気に青年は次の一体にジャンプ斬りを見舞った。脳天をかちわられ、その一体はふらふらと倒れた。

左右から二体のボコブリンが迫り、青年は素早くその二体に目を走らせる。一斉にボコブリンが棍棒を振り下ろそうとした。

「せいやぁ！」

青年は身を素早く翻して周囲を一気に薙ぎ払った。腹に会心の一撃を受け、断末魔を上げながら二体はただの人形のように吹き飛ばされた。

青年は剣を静かに収める。周囲にもうボコブリンはいなかった。再び扉を開くと、青年は薄明かりが見える方へと走り出した。

5，リンク

その頃、洞窟の奥では、ゼルダが壁に縄で繋がれ、ボコブリン達に睨みつけられていた。しかし、彼らにはゼルダを取って食おうといった類いの考えは無いらしく、ただ単に彼女をこの場に監禁し留めておきたいだけのようだった。

ひとまずは何もされないことに安堵していたものの、ゼルダは次第に怖くなっていた。もしかしたら、今後さらに恐ろしい出来事が待ち受けているのではないかと。

「わ、私をどうしたいの？」

震える声で、ゼルダはボコブリン達に問いかける。だが、伝わっているのかいないのか、彼らは喚いて威圧的に棍棒を振り上げるだけだった。ゼルダは心がしぼむ一方で、抵抗の意思なくうつむいてしまった。その時、部屋の入口の方からボコブリン達の叫び声が聞こえてきた。ゼルダは驚きと、若干の期待が入り混じった表情で顔を上げる。ボコブリン達は部屋の入口へ殺到し、それぞれ棍棒を振り上げている。だが、そのボコブリン達は次から次へと吹き飛ばされ、ただの土くれへと還っていく。ゼルダは顔をわずかに輝かせた。ついに助けがきたのだ。

「ゼルダさん！」

村の中の色々な顔を巡らせていたゼルダだったが、それのどれとも当てはまらぬ顔が現れて面食らった。人が良さそうで、ついでにどこか抜けていそうな、あの青年だった。

「え、え……あなたが！？」

「ええ。あなたには僕も助けてもらいましたから」

周りの危険が去ったことを確かめると、青年は一足飛びでゼルダのもとに駆け寄り、縄を手際よく外した。縄目が痕になっている手首をさすりながら、ゼルダは青年に微笑みかける。

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

青年も微笑み返すと、剣を抜き放ったままで出口を指さす。
「先に外へ出ましょう。ハープもちゃんと持ってくださいね」
「ええ。わかってます」

こうして、二人は洞窟の外までやってきた。ハープを小脇に抱えて、ゼルダはドレスに付いた土埃を払う。
「何とか出てこられましたね……」
「ええ。でも、ここはまだ森の中ですし、気を付けないと――」
しかし、そうやすやすと村まで帰してくれるはずはなかった。頷き、村の方角を見据えた青年の表情が固まる。そこにいたのは、大きな銛を右手に、青年の二倍はある身長と、五倍の腹回りを持ったブタのような顔の巨大な魔物だった。表情こそぼんやりとしているが、行動は容赦なかった。何のためらいもなく、青年に向かって手にある銛を突き出してきたのだ。はっとなった青年は、素早い後方宙返りでその攻撃をかわしてみせた。ゼルダはその巨大な魔物を見つめながら、ぼそりと呟く。
「モリブリン……」
「え？」
青年は大声で聞き直す。ほんの少し怯えた表情を浮かべていたゼルダだったが、剣を手にした青年を見ると、ほんの少し勇気づけられた気がした。毅然とモリブリンを見上げ、その間抜けた顔を指差した。
「モリブリンです。あの巨大な銛に突かれたらひとたまりもないので、絶対に突かれないでください！　また気がついたらお教えするので、それまで何とかがんばってください！」
青年はモリブリンの攻撃を再び避け、しっかりと頷いた。
「はい！」
剣を真っ直ぐに構え、モリブリンと正対する。馬鹿の一つ覚えで、モリブリンは再び銛を突き出してきた。青年は斜めに踏み出すようにしてその銛をかわし、一気にその太った腹に斬りかかった。右薙

ぎと左薙ぎを繰り返し、とにかくモリブリンをメッタ斬りにする。しかし、その腹はとにかく柔らかく、斬った手応えがまるで無い。魔物を構成する魔力が尽きない限りはすぐさま傷が治ってしまうため、どれほどのダメージを与えられたかさえ定かでない。

モリブリンは周辺が震えるほど大きく吼え、そのまま銛を横に薙ぎ払った。その腹を攻撃するのに夢中だった青年は、それをかわしきる事ができなかった。

「うわあ！」

青年は地面に打ち倒された。脇腹に痛みを感じながら、何とか青年は起き上がる。思わずその痛ましい様子に目を背けてしまったゼルダだったが、再びモリブリンを見据える。

「あまり近づいていると横に薙ぎ払ってくるみたいですね。モリブリンの腕の動きに気をつけてください！」

青年は頷きで応えると、突き出された槍を飛び上がってかわし、一気にジャンプ斬りを見舞った。そこから身を翻し、遠心力を乗せた回転斬りを見舞い、さらに前方宙返りしながら縦の回転斬りも見舞った。モリブリンはわずかに苦しそうな声を上げたが、それでもまだ戦う力が残っているようだ。再びそれは薙ぎ払いにかかる。青年は慌てて下がり、銛の一撃をかわした。

「そうです！　その調子で頑張ってください！」

今度の青年は、一気に懐へと飛び込み、始めからメッタ斬りにした。モリブリンが銛を突き出そうとするまでの間に、青年はとにかく打ち込み続ける。そうして、再び縦の回転斬りを見舞った時、ついに確かな手応えを感じた。

周囲の草が震えるほどの大声を上げ、モリブリンが倒れた。これほどの巨体だと、消えたときに飛び散る土の量も多い。せっかく土を払ったばかりのゼルダは、また土まみれになってしまった。顔をしかめながら、ドレスやハープに付いた土を払う。剣を再び収め、青年はゼルダの前までやってきた。

「ゼルダさん、大丈夫ですか？」

ゼルダは頷き、にっこりと笑った。
「ええ。これも全部……ええと……」
ゼルダは一瞬何かに逡巡したかのようだった。考え込んでいる様子でこめかみを指で叩き、そのうちに、あっと声を上げて再び顔を輝かせる。
「そうだ！　あなたの名前、リンクにしません？」
突然の提案に、青年は慌てた。
「リ、リンク？」
青年の反応などどこ吹く風、ゼルダは楽しそうに青年の周りを動き、彼の顔色を窺った。
「ええ。あなたの戦いぶりを見ていると……我々の先祖が守ってきた伝説、リンクという若者が、勇気をもってこの世界の危機を救ったという言い伝え、それにそっくりに見えたんです。別に、記憶を取り戻した時、本当の名前が違っていても、それでいいじゃないですか。その日まで、リンクを仮の名前としておくだけですよ。どうですか？」
青年は戸惑っていたようだが、ゼルダの笑顔を見ていると、まあいいかと思えてしまった。ふと表情を和らげ、小さく頷いた。
「わかりました。これから僕は……とりあえずリンクです」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1631z/

ゼルダの伝説　勇気の楽団

2011年12月11日07時50分発行